

上方戯曲名所めぐりの一

『天の網島』の遺蹟を探る

牧村源三

蜷川の橋

何と流れの蜷川、西に見て、朝夕渡る此の橋の天神橋は其の昔、菅相丞と申せし時、筑紫へ流され給ひしに、君を慕ひて太宰府へ、たつた一飛梅田橋、跡おひ松の縁橋、別れを歎き悲しみて、跡にこが

るる櫻橋、今に話を聞き渡る、一首の歌の御威徳、かゝる尊きあら神の、氏子と生れし身をもつて、其方も殺し我も死ぬもとはと問へば分別の、あのいたいけな貝殻に、一杯もなき蜷橋、短きものは我々が、此の世の住居秋の日よ、十九と廿八年の、今日の今宵を限りにて、二人いのちの捨て所、爺と婆との末迄も、まめで添はんと契りしに、丸三年も馴染まい

で、此の災難に大江橋、あれ見や難波小橋から、舟入橋の遺傳ひ……

有名な「名残の橋づくし」の前半、蜷川の橋々に關する部分の解説から始める。

第一が天神橋、これは治兵衛の宅のすぐ近くであり、又、彼は天満天神の氏子であつて、最も因縁の深い橋故に冒頭にまづ此の橋を持出したのであるだから、これだけは道行の順序には關係はなく、その次の梅田橋から、縁橋、難波小橋の五橋が西から數へたその頃の蜷川の橋の全部である。大火以前の蜷川には、梅田橋、縁橋、助成

橋、櫻橋、曾根崎橋、蜷橋、難波小橋の七橋があり、梅田橋から西には淨正橋、汐津橋、堂島小橋の三橋があつたが、梅田橋が當時の新地の西の端に當つてゐるので、まづこの邊から書いて見やう。

田築橋を渡つて阪大病院と中央電信局との間を北へ行つたところ、北からだと出入橋停留所を南へ、次の四つ辻のところから架つてゐたのが此の梅田橋で、これから西、堂島川に入るまで、蜷川(此の邊では福島川と稱してゐた)の跡は、今廣い道路となつて残つてゐる。

大正十一年十月、近松翁二百年記念に鴈治郎が中座で「天の網島」の原作上演をした時、大和屋の場の背景に此の梅田橋を出したが、大和屋が果して此の梅田橋附近にあつたか、或ひは菊野殺しのあつた大和屋がこれと同じ家かなど、いふことはまだ調べてゐないが、下の巻の冒頭に

上の町から下女子、迎ひの駕籠も大和屋の、潜りぐわら／＼つゝと入り……

とあるのを見ると、紀の國屋は上の町即ち一丁目の方にあつたものらしく大和屋はずつと下の方梅田橋の近くにあつたものらしく想像される。

此の梅田橋の附近はいつも近松の舞臺に描かれてゐて、「曾根崎心中」のお初徳兵衛が心中に出る道筋も「梅田の橋を鶺鴒の橋」と見て渡つてゐる。又「氷の朝日」の小かんが平兵衛に逢ふために紙鳶を見る態でそゞろ歩きをしたのも梅田橋であつた。「曾根崎心中」の天満屋は此の橋のほとりにあつたといふことで、これは元禄十五年四月の出来事であつたが、天満屋では、それから三年後の寶永二年十一月にも同じ家の抱へお島が又心中して居り、これは「心中二枚繪草紙」として書かれてゐて三年のうちに二つの心中事件を起してゐるのは珍しいと思ふ。

とにかく、かやうにこの梅田橋界限

は、當時新地の目貫の場所であつたらしく、今の商工会議所や中央電話局のあたりは、日夜絃歌に湧き立つた戀の巷の真中であつたわけである。しかし他の橋の跡にはすべて碑を建てゝそれと示してゐるのに、近松の作に一番よく出て来る此の梅田橋だけには何の標識も残されてゐず、たゞ梅田貨物驛へ急ぐトラックや荷馬車が騒々しく續くばかりの、誠に殺風景な現在の風情である。

さて次が縁橋、これは梅田運河との交叉点の東側、出入橋の東詰を南へ折れたところに出入橋と鍵の手に架つてゐたもので、今、道路の西側、川べりに「元縁橋跡」といふ小さな石標がその跡を示してゐる。なほ、梅田運河は明治時代に出来たもので、蜷川から以北には以前から小川があつたのを利用して、明治七年五月梅田ステーション開設の後、水上運輸との連絡を取るために、その翌々九年六月に開鑿して、

堂島川に通じたものである。

櫻橋は、今の櫻橋交叉点の南方、毎日新聞社の北側の道路を隔てゝ角に京富といふ菓子店があつて、その角に、「元櫻橋」と刻つた石標が建つてゐるしかし、實際の位置はもう少し北で、此の京富の北横を蜷川が流れてゐたものである。なほもう一つ同じ石標が、電車道を隔てゝ西側の書店の表にもあるが、これが即ち櫻橋の南詰の正しい位置である。

此の櫻橋の北詰を西へ入つたところ今、豊國火災の西隣に空地になつてゐる所が嵐の芝居、後の福井座の跡で、「生玉心中」に「さつき言うてお越した蜷川の嵐の芝居へ便宜して下んしたか」とあるのがこれであつて、座本は「今この堀にてやつしかたの總大將、おそらくはつゞく人はあるまい」（役者反魂香）といはれた嵐三十郎であつた。そしてその芝居の中にあつた金光稻荷の社だけが今も残つて祀られてゐる。

る。又これは明治時代のことではあるが、櫻橋交叉點を北へ入つた東側、北消防署のあたりに明治三十一年二月に梅田歌舞伎座が建ち、九代目團十郎が柿葺落しに來演したが、翌年一月火を失して全焼してしまつた。更に今の毎日新聞社のところには、明治四十四年二月に堂島座が建つて、鳩治郎、齋入一座で華々しく柿葺落しをやつたが、その後成績が思はしからず、大正三年大毎社に買収せられたといふやうなこともあつて、其の他北濱の帝國座といひ、大阪ではどうも道頓堀以外の芝居は永續しないらしい。

なほ、此の櫻橋と綠橋との間、今の演舞場の角を南へはつた所に助成橋といふのがあつたが、これは道行の中に出てゐず、その頃はまだなかつたのだらう。

梅・松・櫻

さて、此の道行の最初の方は、天神橋に因んで、例の飛梅・追松の傳説を

織込んであるが、此の傳説といふのは菅公が筑紫へ左遷される時、その邸の紅梅殿の梅の樹に向つて

こちふかは匂ひおこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ

といふ歌を残されたので、梅はそれを感じて菅公のあとを慕つて筑紫へ飛んで行つた。これが即ち太宰府安樂寺の飛梅である。ところが、都の同じ邸内にあつた櫻の樹は、梅にのみ御詠があつて自分には何も言ひ残されなかつたといふので、それを嘆いて一夜のうちに枯れてしまつた。菅公は此の事を配所で聞かれて、

梅は飛び櫻は枯るゝ世の中に松ばかりこそつれなかりけれ

と詠まれた。此の下の句は又、何とて松はつれなかるらん、とも傳へる）これに慚憤した松は、これまたあとを追うて筑紫に飛んだが、これが即ち追松であるといふのである。「たつた一飛梅・田橋」に「飛梅」を言ひかけ、「追

松」の縁から「綠橋」の縁を出し「こがるゝ」には「焦る」と「木枯る」をかけてある。なほ「おひ松」には地名の老松町を言ひかけてあるといふ説もあるが、これは西天滿に屬する町名であつて道順とは關係はないから、此の説は少し唐突すぎるだらう。

とにかくこれは既に室町末頃の隨筆「相鳴曉筆」に出てゐる傳説であるがその以前には梅と櫻だけで、松のことはなかつたもので、「源平盛衰記」には、梅は飛び櫻が枯れたことについて源順が歌を詠んで

梅は飛び櫻は枯れぬ菅原やかけてぞ頼む神の誓ひを

と言つたとある。しかし、本居宣長は此の歌を評して「本末かけあはず、いとく拙き歌也」とて、順が歌の原作者たることをも否定してゐる。

そして、此の傳説が更に發展して、彼の有名な竹田出雲等の「菅原傳授手習鑑」の松王・梅王・櫻丸の三つ子の

兄弟が生まれ出たのであるが、木谷蓬吟氏の著「大近松全集」中の所説を借りると

延享三年正月、竹本座の「楠昔噺」大當りにて、その當り振舞として、座主作者太夫三味線彈人形遣ひ一同が、花々しく屋形船に乗り込んで、天満大川のあたりへ出遊した。偶々大興行藝題、脚色の世界話など協議するうち、作者の一人、三好松洛は「天満宮の天神一代記を仕組む可く、腹案や、纏れり」との發言に、一座の作者竹田出雲、並木千柳も賛同し、いよ／＼菅公一代記を執筆し、八月興行に上演することになった……との逸話が傳はつてゐる。

この話に由つて想像を逞しくすると、船中作者等の雑談には、必ずや其邊りの地理關係からも「天網島」の作に付て、種々の話柄が生れ出た事と思はれる。その際「菅原の三つ子の命名に付ては、「橋づくし」の一節である「たつた一と飛び梅田橋、跡老松のみどり橋……跡にこがる、櫻橋」の一節から案出して、さては

松王、梅王櫻丸と名付けたものではあるまいか、尤も松は北野千本松一夜發生の奇蹟もあり、梅は飛梅の逸事、櫻も御所に愛植されて枯死したとの傳説もあつて、松梅櫻の命名には斯うした根據もないではないが、當時作者生活の情態から察すると、如上の史的根據よりも、寧ろ彼等の日常崇慕の神と仰ぐ近松巢林子の作品から想ひ起した命名と云つた方が自然ではあるまいか。

とあるのは、如何にもそれかとうなづかれる。

櫻橋の交叉點で少し停車しすぎたので、先を急がう。

櫻橋の北詰を東へ行くと、最初に書いた河庄の跡がある。更に東へ半町ほど、南側の角に大黒湯といふ風呂屋があつて、そこを南へ折れた西側の明定鯉節店の表に「曾根崎橋之跡」の石標が建つてゐるが、此の橋は道行の文には見えない。

そして次が蜷橋、これは既に書いた

通りであるが、これまでの四つの橋は一々それを渡つたのではなく、たゞ各その北詰の通りを西から東へ歩いて行つたのであつて、此の蜷橋に到つてはじめて南へ渡つた。渡つて半町ばかり行くと、堂島川に架つた大江橋の北詰に出る。そこを左へ折れると、すぐ難波小橋で、蜷川の東端、堂島川の分流が北へ入り込んだ蜷川の第一橋に當るもの、他の橋は皆南北に架つてゐたが此の橋だけは東西に架つてゐた。餘談ではあるが、大火前の此の橋の橋脚に洪水の増加量を測る目盛りがついてゐたのはちよつと珍しいことであつた。

その次にもう一つ舟入橋といふ名が出て来るが、これは固有の橋名ではなく、昔此の邊から中之島にかけてたくさんあつた諸國大名の藏屋敷の濱に、荷舟の便宜上、川から邸内へ流れを引いたその上へ架けられた橋のことで、だから、此の舟入橋といふものは各所

に數多く散在してゐたわけである。その名残は、現在中之島北側の電車道、玉江橋から西に高松橋、徳島橋、熊本橋などといふのが残つてゐるが、もといづれも橋台を高くして、橋も反りがきつく、荷物を積んだ舟が出入りのしよいやうに出来てゐたものである。それでは小春治兵衛の渡つた舟入橋は何處にあつたかといふと、難波小橋の東、今の控訴院の玄關の眞正面あたりに東西に架つてゐたもので、そこは維新前までは鍋島濱と言つて、佐賀鍋島藩十五萬石の藏屋敷のあつたところである。

なほ、元祿の大坂の地圖を見ると蛭橋はなく、その下流に古橋といふのがあり、櫻橋、緑橋もなく、梅田橋だけが書かれてゐる。元祿十六年五月の、「曾根崎心中」には梅田橋が出てゐるから、此の橋は既にその頃にあつたといふことがわかるが、それから二十年後の享保五年の小春治兵衛の心中の時

にはこれだけ橋の名がふへて居り、その僅か二十年の間に、いかに此の土地が急激に繁昌して來たかどうかがへると思ふ。

一體近松の心中ものは全部で十一あつて、その中素人同志の心中物語は五つで、残りの六件が遊女相手の心中であるが、その六つの中の四つまでがこの北の新天地から出てゐるのは、此の廓の繁榮を示すと共に、新開地であるがために遊女に氣品がなく、遊客もあまり立派でなかつたためではないだらうか。

最後に、此の蛭川の名はどうして出來たものかを考へて見る。此の川は一名曾根崎川とも梅田川ともいはれ、下流では福島川とも呼ばれたが、傳説では、すつと昔からあつた名もない川の廣い幅を、土地を開くについて縮めたので、チメ川と稱したのだといはれ、或ひは此の川で蛭がたくさん取れたので蛭川と名づけたともいはれる。

話が大大下へ落ちて來たので、今回は此の位で筆を置いて、次號には網島大長寺の小春治兵衛の墓や、天下茶屋安養寺のおさんの墓などについて書いて見やうと思ふ。

前號誤植に深くお詫

前號は印刷所變更のため種々の齟齬を生じ、更に編輯員の身邊多忙のため校正が極めて粗漏で各面に魯魚の誤りあつたことを汗顔に存じております、殊に西村紫紅氏玉稿「私の義大夫觀」本文の校正が實に亂雑であつたことは筆者紫紅氏に對し洵に申譯ない失態でありまして、同氏に對し衷心よりお詫申すと共に今後は編輯に細心の注意を拂つてその罪の償ひと致し寄稿家各位に陳謝致します。

なほ編輯締切日を嚴守したいと存じますので、次號は十二月十日を締切日と致します、その日以後の着稿は遺憾乍ら翌月號に譲ります。(編輯部)